

9) 下垂体卒中を契機に発見され、Hardy の手術後 3 年後に Basedow 病を発症した Cushing 病の 1 例

田村 紀子
他内分泌班一同 (新潟大学第一内科)

症例：40歳女性。主婦。家族歴、既往歴に特記すべきことなし。現病歴：1987年4月頃より、クッシング兆候出現していた。6月21日急に下痢、吐き気、頭痛が出現し木戸病院を受診したところ、クッシング症候群の疑いで入院をすすめられた。次第に頭痛は強くなり、神経症状も出現してきた為、下垂体卒中の診断で Hardy の手術となった。術後症状は改善し外来で経過観察されていたが、1年半頃より体重減少、易疲労感が出現し、検査上 Basedow 病と診断された。考察：ステロイド産生腫瘍と自己免疫疾患が合併した場合、後者の症状がマスクされ、腫瘍摘出後に症状が顕性化する場合がある。実際、クッシング症候群と甲状腺機能異常の合併例の報告もあり、その際術後に自己抗体の上昇がいわれている。しかしこの症例では、術後の ITL 負荷試験で TSH が反応していることから、クッシング病とバセドウ病は別個に発症したものと考えられた。

10) 二次性副甲状腺機能亢進症を示した胃癌骨転移の 1 例

塚田 裕子・佐藤 幸示 (県立がんセンター)
筒井 一哉 (新潟病院内科)
平田 泰治・堀田 利雄 (同 整形外科)
角田 弘 (同 病理)

高 AIP 血症、びまん性の骨硬化像が発見の契機となり、生前原発不明の造骨性骨転移の診断で、剖検にて胃癌の転移と判った55歳男性の症例を経験した。入院時血清 Ca は 7.5 mg/dl, P は 3.7 mg/dl と正常範囲であったが、尿中 Ca が 20.0 mg/day と低値であり、副甲状腺ホルモンが 740 pg/ml, 尿中 cyclic-AMP が 5,189 pmol/ml と共に上昇しており二次性副甲状腺機能亢進を呈していた。悪性腫瘍の骨転移による二次性副甲状腺機能亢進症は報告が殆どないが、骨新生の著明な亢進により大量の Ca が血中より動員され相対的な Ca 不足となった結果このような Ca 代謝異常を来した可能性が推察された。

11) 電撃を機に発症したと考えられる中枢性性腺機能低下症の 1 例

五十川 修・中沢 朝生
谷 長行・百都 健
伊藤 正毅・柴田 昭 (新潟大学第一内科)

今回我々は電気ショックに起因したと思われる中枢性性腺機能低下症の 1 例を経験したので報告する。

症例：31歳、男性。主訴：射精不全、性欲低下。現病歴：昭和56年7月、6,600 V の電気に接触し飛ばされ、その約2週後より射精不全が出現し、現在まで持続。平成2年5月泌尿器科受診時に Testosterone, LH, FSH の低下を指摘され11月当科受診。検査の結果、TSH, Gonadotropine の分泌低下が確認された。また画像上異常所見は認めなかったものの、LHRH 連続負荷で LH, FSH の分泌改善が認められたことから障害部位は下垂体基部以上と推定された。

12) Giant-cell granulomatous hypophysitis の 1 例

黒木 瑞雄・土田 正 (新潟県立中央病院)
斎藤 明彦・須田 剛 (脳神経外科)
吉岡 光明 (同 内科)

最近、我々は giant-cell granulomatous hypophysitis の一例を経験したので、文献的考察を加え報告する。症例は77才、女性。視力障害と頭痛、全身倦怠及び発熱を主訴に当科受診。神経学的には両耳側半盲と視力障害を認めた。検査所見では、低 Na 血症、汎下垂体機能低下症の他に、髄液検査でリンパ球優位の細胞増多 (481/3) を認めた。頭部 X 線撮影ではトルコ鞍の破壊は見られず、MRI では鞍上部に突出するトルコ鞍部腫瘍を認め、正常下垂体との分離は不能であった。副腎皮質ホルモンの補充療法により低 Na 血症は改善され、髄膜炎症状も次第に軽快したが、視力視野障害が続くため、経蝶形骨手術により腫瘍を摘出した。組織学的には、リンパ球、形質細胞の浸潤を主体とし、giant cell が散在する granuloma であった。術前の検査からは、梅毒、結核、サルコイドーシスは考え難く、その成因は不明である。過去の報告例を review し考察を加える。